

山口ゼミナール 広島県尾道巡検報告

国際日本学部 国際文化交流学科3年
後藤 沙羽・相原 七夏・遠山 和奏

はじめに

観光地理学を専攻とする山口ゼミナールでは、2025年9月2日から4日にかけて広島県尾道市と廿日市市宮島で巡検を行った。「日本遺産」において「箱庭的都市」と称される尾道では、景観観察や現地の方、観光協会の方へのヒアリングを行い、訪れた各地点で学びと気づきを得ることができた。本稿では、尾道巡検で訪れた千光寺、まちなか文化交流館(BANK)、中心市街地の商店街、猫の細道、浄土寺について報告する。

千光寺

巡検1日目は、まず千光寺ロープウェイを利用して山頂まで行き、千光寺公園内にある「文学のこみち」を通って山を下りながら千光寺へと向かった。

千光寺公園内には、2022(令和4)年にリニューアルオープンした「PEAK(ピーク)」という名の展望台があり、そこから尾道水道と「箱庭

的都市」と呼ばれる尾道の街並みを広く見渡すことができる。「文学のこみち」では尾道ゆかりの25名の詩歌や小説の断片などが刻まれた自然石を見て歩くことができる。大宝山の自然を体感しつつ文章を読むことで、情景が鮮やかに喚起されるこみちとなっている。

大宝山の中腹にある千光寺は、806年から続く寺院であり、その立地から尾

道の街と海を一望することができる。千光寺の本堂や三十三観音堂付近から見る尾道水道と街並みは、山頂から見る景色とは少し異なる。標高が低くなったことにより、尾道の人々の生活をより近くに見ることとなる。視線の先の対象物が山頂よりも拡大されることによって、尾道が「箱庭的都市」と呼ばれる所以をより感じ取ることができた。尾道水道と尾道三山(浄土寺山、西國寺山、千光寺山)に挟まれた土地や山裾に路地や坂道が入り



文学のこみちの碑



千光寺から尾道水道方面を望む

組み、建物の高密度な街が広がっている様子がよく分かる。このような街の作られ方こそが尾道の魅力である。

まちなか文化交流館 (BANK)

千光寺の後は、本通り商店街に位置するまちなか文化交流館(BANK)を訪れた。まちなか文化

交流館 (Bank) は、旧三井住友銀行尾道支店を改修し、2023 (令和5) 年から市民の文化活動拠点として開放されている。尾道の海上・陸上の交通網の発達と複数の金融機関の設立、住友と尾道の関係に関する歴史や、主に文学・映画に関する文化などを観光客に伝えるための施設でもある。

この施設の交流スペースにおいて、一般社団法人尾道観光協会 (おのなび旅行社) の石原尚味様より尾道の観光客や商店街、移住や生活している方々についてのお話を伺った。

石原さんのお話では、近年尾道には若い世代の人が多く訪れていて、観光客のみではなくお店を尾道で開く人も増えていることが分かった。尾道に訪れる観光客はリピーターが多く、そのまま移住に進む例があるという。移住した若い世代の人が新しいものを尾道に取り入れ、それがきっかけとなって同世代が訪れるようになる。ここで訪れた人の中からもリピーターが現れ、さらに尾道に移住する人も出て来て、ますます尾道を活性化させる力となる。このような良いサイクルがみられるようだ。

しかし、尾道に移住するにあたって大きな課題となるのが生活のしづらさである。一つ目は、この都市の地形と道路網に関する弊害である。路地が入り組んだ「箱庭的都市」は尾道の大きな魅力であるが、欠点ともなる。路地には車を乗り入れることができず、家まで荷物を運ぶには全て自分で持って運ばなければならない。そこに加えて尾

道の北側は坂道が多く、傾斜が荷物をさらに重く感じさせる。二つ目は、商業の立地に関する弊害である。中心市街地のメイン通りである商店街には多くの観光客が訪れるお店が並ぶが、地元住民が生活のために必要なものを買うことのできる場所が時代の変化と共に減少し、今や隣の市まで車か電車で行く必要があるという。そのため尾道の中心市街地では空き家も少なくない。現在では空き家を活用した移住政策などが進んでいるが、少し住みづらい立地ということは変わっていない。

住みづらい状況でも、尾道の街並みや海などの魅力があるため移住してくる人々はいるといふ。そのような人々をどのように増やしていくかが、尾道の中心市街地の空洞化を食い止めるための重要な観点となる。先のサイクルを考えれば、観光客増がきっかけとなる。しかし、石原さんの話からは、そもそも観光で尾道を訪れる人の大半は、サイクリングが目的であったり、広島市やその周辺 (宮島など) には訪れても、尾道まで足を延ばす人は多くなかったりと、尾道市の観光振興としてはもう一步の状況であることが分かった。

また、尾道に訪れても宿泊地は別の地域ということも多いようだ。観光客の滞在時間を延ばすことができれば、尾道の街並みや商店街などの魅力に気づき、関係人口や交流人口を増やすことに繋がります。尾道をより活性化させることができる。これは日本の多くの観光地域で抱えている課題であり、この課題へのアプローチを私たちも大学での

学びにおいて検討してみたい。

今回の巡検では、観光地の豊かさには訪れる場所の立地と地元住民の生活が密接に関わっていることを理解することができた。

商店街

尾道の中心市街地には、尾道本通り商店街という長い商店街が存在する。尾道本通り商店街事務局HPによると、全長約1・2キロメートルにもわたり、日本有数の長さだという。芙美子通り、土堂中商店街、本町センター街、絵のまち通り、尾道通りの5つの商店街で構成され、約210件の店舗が軒を連ねている。創業100年を超える老舗は10店舗以上残っており、文化財となっている建築物も存在する。また、独自性のあるショッパやカフェも立ち並ぶ。

尾道の商店街を歩いてまず感じたのは、人通りの少なさであった。住宅街から商店街へ出るには



「センター街」のフォントが印象的

坂や踏切を越える必要があり、それが日常的な利用の負担となっているのではないかと考えた。営業時間の短さやシャッターを下ろした店舗も多く、商店街の活気が薄れている印象も受けた。

その一方で、商店街の町並みには古い建物や看板が多く残り、外観を活かしながら観光資源へと転換する好例であると感じた。全体として昭和レトロな雰囲気が漂い、特に今の若い観光客にとっては魅力的に映るように思えた。かつては地域の生活を支える場所であった商店街も、現在は観光を意識した場所へと変化している。その過程で、古い建物を改修したカフェや雑貨店が増え、街並みに新しい価値を与えているのが特徴的であった。観光客向けの店舗が増える一方で、日常生活に必要な商店が減少し、住民の利便性が損なわれている可能性も感じられ、先の石原さんの話と合致した。

商店街を覆うアーケードは、雨や日差しを避ける利点がある。私たちの街歩きに際しても、残暑厳しい環境の中で日差しを避けるのにとっても助け



商店街のアーケード

られた。アーケードの存続については一般的に、暗さや老朽化、歴史的景観を遮る存在として賛否がある。

尾道の商店街は、古いものを残しつつ新しいものを取り入れる「保存と更新のバランス」を象徴する場所であり、観光と生活を両立させる工夫が今後ますます重要になると感じた。

猫の細道

尾道はかつてから、道端で猫を見かけることが多いことで知られていた。現在では、尾道の斜面エリアの一画に、「猫の細道」と呼ばれる約200メートルの細い路地がある。尾道イーハトーヴHPによると、園山春二氏によって作られた「福石猫」と呼ばれる丸い石に猫の絵が描かれたオブジェが至る所に設置され、アートと路地文化が融合した独特の空間となっている。

実際に訪れてみると、名前から期待していた猫との出会いはほとんどなく、残念ながら実際の猫はワークショップの中にいる一匹しか見られなかった。訪問時期の酷暑を考えると、猫たちも日陰や涼しい場所で休息していたのだろうと推測される。それでも、細い路地の両側に並ぶ古民家や小さなギャラリー、カフェなどは趣があり、坂の街尾道らしい風情を感じることができた。

特に印象的だったのは、路地で出会った観光客のほとんどが若い世代だったことだ。古民家のノ



階段猫アート

スタルジーとアートが融合したこの空間は、SNS文化と非常に相性が良く、「映え」スポットとして現代の若者の心を見事に捉えていると感じた。この「細道」は、単なる古い路地ではなく、SNSを通じてアートとリノベーションという常に新しい魅力を発信し続けられている点で、尾道観光の核のひとつとしてあり続けているのだろう。このような持続的な魅力づくりは、地域再生のひとつの方法として注目に値するだろう。

浄土寺

浄土寺は、616年に聖徳太子の開基として伝えられる真言宗の寺院である。名勝の庭園や、国宝の本堂内陣と多宝塔を有する。本堂は、鎌倉時代の和様建築の傑作として知られ、重厚な佇まい



浄土寺の境内

が歴史の重みを感じさせる。多宝塔は、1328年に建立されたものである。

境内に足を踏み入れると、静寂に包まれた空間が広がり、街の喧騒から切り離されたような感覚を覚えた。特に印象深かったのは境内にある日本庭園である。石や植物が絶妙に配置され、見る角度によって異なる表情を見せる美しさに心を奪われた。手入れの行き届いた苔の鮮やかな緑や、配置された岩の佇まいが、静かで落ち着いた雰囲気や多宝塔の優美な姿も素晴らしかったが、この庭園で過ごす時間は特に贅沢に感じられた。

観光客はほかの尾道の観光地ほど多くなく、ゆっくりと歴史建築や庭園の美しさを堪能できる環境であった。国宝建築と伝統的な日本庭園を同時に体験することで、日本文化の奥深さを肌で感じ、文化財保護の重要性についても考えることのできた貴重な経験となった。

おわりに

今回の尾道巡検を通して、歴史的建築物や文学、芸術が共存する尾道の魅力を多面的に実感することができた。千光寺や浄土寺では、古くから続く信仰や建築美を通して、地域の歴史的価値を実感した。一方で、商店街や「猫の細道」では、古い街並みを活かしながらも若い世代が新しい文化や観光の形を生み出している様子が印象的であった。こうした「古さ」と「新しさ」の共存こそが



千光寺から尾道水道を背景としてゼミ生の集合写真

尾道の魅力であり、観光と生活の両立を図る上で重要な要素であると感じた。

本稿は、現地で見聞きしたことと、入手したパンフレット、以下の参考文献をもとに作成した。写真は巡検期間中に撮影したものである。末筆ながら、一般社団法人尾道観光協会（おのなび旅行社）の石原尚味様に感謝申し上げる。

【参考文献】

尾道市文化振興課文化振興係2023. まちなか文化交流館 (Bank).

<https://www.city.onomichi.hiroshima.jp/soshiki/7/62836.html>

（最終閲覧日2025年10月10日）
尾道本通り商店街事務局 尾道本通りについて.

<https://onomichi-hondoori.jp/about-us/>
（最終閲覧日2025年10月10日）

尾道イーハトーヴ. 猫の細道.
<https://ihatov.in/castrail/>

（最終閲覧日2025年10月10日）
浄土寺. 浄土寺本堂.

<https://ermjp.com/j/temple/houmotu/keniku/001.htm>

（最終閲覧日2025年10月10日）
浄土寺. 浄土寺多宝塔.

<https://ermjp.com/j/temple/houmotu/keniku/002.htm>
（最終閲覧日2025年10月10日）